

琉球大学学術リポジトリ

琉球音楽楽典考 -世禮國男著「琉球音楽楽典」の理解を求めて-

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部音楽科 公開日: 2011-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山内, 昌也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20905

琉球音楽楽典考

～世禮國男著『琉球音楽楽典』の理解を求めて～

山内昌也

序章

研究の目的

筆者と三線との出会いは小学5年生のときである。当時学校現場に三線が次第に導入されてきたころである。学校でのクラブ活動と研究所に入門、師匠より手ほどきを受け、三線音楽の魅力に惹かれていった。もちろん、当時はその三線音楽が「(琉球) 古典音楽」なのか「民謡」なのかは全く解らず、ただ、師匠から与えられた工工四（三線用楽譜）をひたすら練習する毎日であった。

ある曲を練習しているときに、疑問が生じた。“尺”のポジションが普段押さえている場所と違うのである。それも同曲の中で“尺”が「移動」するのにも驚かされた。但し、工工四中には何も記載されていないのである。

当時、小学生の筆者は、「これは大発見なのでは」、と師匠に質問したところ、師匠は野村流音楽協会発刊『声楽譜附 工工四 上巻 琉球音楽楽典』を説明した。その中に、“老中尺の勘所の移動”という内容で記載されていた。しかし、その内容理解はとても困難なものであった。師匠も「この楽典を理解するのは大変難しい」、と発言していたのを記憶する。そのころから、「古典音楽」を中心に練習していきたいと考えた。

それから数十年経ち、現在筆者は三線を指導している。指導の中で、どうしても避けられないのが「楽典」だと考える。三線人口が増え、様々な曲をマスターする上で、よりわかりやすい楽典の説明文があってもよいと考える。特に古典音楽の場合、今回この論文でも取り上げる“本調子のカギヤデ風型・花風型・昔節型・瓦屋節型・鳩間節型（以下“型”と統一する）”などを知ることにより、完成度が増すのではないかと考えられる。

現在、筆者は沖縄県内だけでなく、県外においても指導を行っているが、稽古回数は月1回である。それ以外は自主練習になるが、どうしても頼るものが工工四なのである。

練習用の音源もあるが、より確かな情報が記載された工工四が存在することで、練習内容が充実するのではないかと考える。ただ、ここで確認したいことは、決して工工四通り弾けたところで、それが完成ではないということである。

近年、古典音楽の演奏会などで工工四通り演奏（暗譜）できて満足している実演家が増加していると思われる。人前で演奏するにあたり、極度の緊張と戦いながら演奏する為、暗譜だけ

で精一杯なのかもしれないが、はたして本当にこれで良いのか。

あくまでも、工工四通り弾けたことは、“スタートライン”であり、そこから様々な音楽性、曲に対する思い入れが入ってきて、初めて演奏することができる。そのスタートラインに達するまでの情報、資料がより多く存在してもいいのではないかと考え、今回タイトルのテーマで書くことにした。

今回は、“本調子の型”が中心である。楽譜の構造を知る1つの方法となればと考える。実在する楽典を表記し、それに伴う解説と筆者の考えを記載する。解説においては、あえて“です・ます”調とし、親しみやすくしてみた。

第1章は、琉球音楽楽典の著者世禮國男についてと楽典について、第2章で琉球音楽楽典考として型について、第3章でまとめとする。

第1章 琉球音楽楽典の理解 ～絃楽譜を中心に～

1、世禮國男について

世禮國男（せれい くにお）は1987（明治30）年中頭郡与那城村平安座に生まれる。教育者、音楽家、詩人。沖縄県第一中学校では授業料免除の特待生となる。

小学校教員検定に合格、小学校教員を経て文検に合格。県立農林学校、県立第二中学校教諭。そのころ伊差川世瑞（いさがわ せいずい）に古典音楽を師事、声楽譜附工工四を編纂（1935（昭和10）年～1941（昭和16）年の間に全四巻発刊）し画期的な業績を残す。工工四上巻には附録として『琉球音楽楽典』が記載されている。詩集『阿旦のかげ』（1922年）、『琉球音楽歌謡史論』（1940年琉球新報に掲載）、『郷土音楽の往く道』（1941年琉球新報）、『久米島おもろについて』（1942年）、などの論文がある。

戦後は知念高等学校、コザ高等学校の校長となるが体調を崩し、1949年退職、翌1950（昭和25）年1月23日没。コザ高校の校歌作曲は世禮によるものである。

2、楽典のについて

『広辞苑』（第六版）より“楽典”を検索すると、「楽譜の読み書きに必要な基礎的な音楽の事項。音名・譜表・リズム・拍子・音程・音階など。またそれを記した書」とある。

世禮國男著『琉球音楽楽典』は1935（昭和10）年に書かれた。現在は野村流音楽協会声楽譜附工工四上巻内に掲載されている。全27ページで構成されており、要目として下記の通りである。

第一章 琉球三絃楽譜の歴史

第二章 音楽の要素

第三章 絃楽譜 (一) 三線の勘所と指位及び記号 (二) 音符並び記号 (三) 音階と音程 (四) 老中尺勘所の移動 (五) 倍音と律呂 (六) 各音の対照表 (七) 調子

(八) 整調法 (九) 旋法 (十) 旋法の見分け方 (十一) 絶対的音高 (十二) 音の長短〈間〉 (十三) 速度 (十四) 音の強弱〈間と拍子と五分拍子〉 (十五) 弾奏法

第四章 声楽譜 (一) 声楽譜創制に就いて (二) 音符、記号 (三) 音階一・凡・才音 (四) 音程と旋律 (五) 歌唱法その他

第五章 野村工工四抄録

音楽之友社『楽典』の序では次の通り記載されてる。

「音楽を基礎的に理解するには、まず楽典の理解が必要である。しかし、この種の書物には、ともすればおちいりやすい二つの方向がある。その一つは純粋音楽理論としての理論を大上段にふりかざして、かえって難解なものにしてしまったり、著者の理論の満足感のために、不必要でさえあると思われる理論をながながと展開したりすることになりがちである。二つ目はこれとは反対に、楽典という語のとおり、記譜上の約束ごとだけの解説にとどまって、中学の教科書の域を出ないものになったりすることである。これらは二つとも意味のうすいものである。十分に論理の筋が通っていて、しかも基礎的理解に必要度の高いものを重点的に扱い、わかりやすく、実用性もそなえた、高度な啓蒙書としての楽典の書物が必要とされていたわけである。

一読して理解できたつもりであっても、楽典に関する理論の理解というものは程度の差が大きく、しかもなかなか完全にはゆかないものである。」

より解りやすい説明を加えることにより楽典の理解を完全なものにしたい。

第2章 琉球音楽楽典考

1、旋法 [第三章 (九) 旋法]

(本文)

絃楽と声楽では同一曲中に於いてもその使用された音が必ずしも一致するとは限らない。三味線は純粋な旋律楽器ではなく寧ろ伴奏楽器である。だから歌曲の旋律通りには弾奏せず、多分に歌曲の協和音を用ひて音楽的効果を出すように弾奏される。譬へば、昔節型の絃音には四音は余計用ひられては居ないが、声楽には沢山出てくる。又瓦屋節型の弦楽には合音は少ないが、然しこの型から合音を除くことは出来ない。不必要な音を省略する琴の調子にも合音のあるものでも解る。(尤も琴の整調は全く声楽のためとは云へないが) けれども大体に於ては、絃楽譜に現われた音を以ってその曲の使用音を知ることが出来る。そこで、今弦楽譜に表れた使用音の類型に依って第七表の如き八型に類別することが出来る。

(解説)

絃楽（三線）と声楽（歌）はその曲において、使用される音は必ず一致はしません。

あくまでも、古典音楽において“歌”が優先され、三線はその伴奏になります。その効果として、声楽の旋律通りには弾かず（同じ曲もあります。「安波節」など）歌との和音を用いて音楽効果をだすように演奏されます。

その一覧として第七表のように“〇〇〇型”によって分類されます。特に本調子においても五種類に分類されます。

(筆者論)

分類を知ることにより、曲の作りを知ることができます。今回は本調子を確認してみましょう。二揚調、三下調と混乱しないように。

[第七表] 各旋法使用音（本調子のみ）

(イ)カギヤデ風型…合	乙	老	四	上	×	尺	工	五	六	七	八
(ロ)花 風 型…合	(乙)	老	四	上	×	尺	工	五	六	七	八
(ハ)昔 節 型…合	×	老	四	上	×	尺	工	五	六	七	八
(ニ)瓦 屋 節 型…合	×	老	四	(上)	中	尺	工	×	六	七	八
(ホ)鳩 間 節 型…合	乙	×	四	上	中	×	工	五	×	七	×

(本文)

注 ×ハ使用サレヌ音。括弧ハ節ニ依ッテ全ク使用サレナイモノ普通ニ使用シタモノ、又ハ少し使用シタモノガアル。(ニ揚型説明は省略) 花風型ト昔節型ハ同一型デアルガ、今は別ニシテオク。一般ニ八重山節ト云ハルモノニハ鳩間節型と瓦屋節型トガアル。

(解説)

注 「×」は使用しない音です。()は曲によって用いられる音です。

(筆者論)

花風型と昔節型では合・乙・老・四のところで旋律の違いがあるので、別型で考えてみましょう。鳩間節型と瓦屋型もそれぞれ別々に考えてみましょう。

2、各種旋法の見分け法 [第三章 (十) 各種旋法の見分け法]

(本文)

琉球音階に於て基本的な音は、合四尺工の四音で、極く少数の曲の外ほとんど総ての曲に用

らられてゐる。特に工音は万歳かふす節を除く全曲に用ひられてゐる。外の音は旋法に依って相違があるから、その相違する音に依って大體の特長を知ることが出来る。

- (イ) 本調子にして中音(ウチヌジ(*1)中にあらず)無く、乙音のあるものはカギヤデ風型。
 (ロ) 本調子にして乙音中音(ウチヌジ中にあらず)無きものは花風型、但し乙音は花風、本花風、仲風、赤田風、今風に一、二ヶ所使用されてゐる。中巻では昔節型である。この二型は同一型と見てよいが、速度や気分の相違から別型にしたのである。昔節型の作田節の歌詞と花風節の歌詞とは拍子関係の異なるのみで、音配列が酷似して居り、之に類するものが他にもある。又打抜音の使用されてゐる点など同一型と見てもよい。但し暁節は瓦屋節型。
 (ハ) 中尺音を用ひて乙五音のないのは瓦屋節型。(一上調も同じ)中音を用ひて老尺六音の無いのは鳩間節型である。(但し手事類には例外がある。)

(解説)

琉球音階において、基本的な音は“合・四・尺・工”(ド・ファ・シ・ド)で、ほとんどの曲においてこの4音が使われます。とくに“工”は万歳かふす節(続巻在)を除く全曲に使用されています。

その他使用される音は旋法によって違いがあるので、その特徴を知ることが重要です。

(※①②③④は筆者論)

- (1) 本調子で“中”が無く(打抜音(*1)は例外)、“乙”があるものは「かぎやで風型」
 ① “中”が無く、“尺”があるもの。
 ② かぎやで風節と同じ歌持(前奏)(工五四工四乙四)の曲。
 ③ 歌持中(もしくは曲中)に“乙”が入っている曲
 ④ 歌曲中に“乙→四→合”と進行している箇所がある曲
 (2) 本調子で“中”と“乙”が無く(打抜音は例外)、“尺”があるものは「昔節型」
 ① 合～四までの音程としては必ず合→老→四もしくは四→老→合と弾きます。
 ② 暁節は中位奏法なので、瓦屋節型です。
 (3) 昔節型と非常に似ていますが、“乙”がたまに出る場合は「花風型」
 ① 合からの上行形は合→老→四となりますが、老からの下降形は四→老→合の場合と四→老→乙→合となる場合があります。
 (4) 本調子で“中”と“尺”が両方出て来て“乙”“五”が無い場合は「瓦屋節型」
 ① 瓦屋節型の場合、左手が中位で演奏するので、すぐ分かります。その場合、工工四に左手の運指番号(㊦㊧㊨)が記載されています。
 (5) 本調子で“尺”が無く“中”が出る場合は「鳩間節型」
 ① 鳩間節型の琉球古典音楽は少ないと思います。(八重山曲に多い)実際に工工四より調べると、「こてい節の手事」「安波節」「松本節」「子守節」の4曲です。

(鳩間節は続巻の附録として記載されています。)

表1：型一覧表

(かぎやで風型は [か] 昔節型は [昔] 花風型は [花] 瓦屋節型は [瓦] 鳩間節型は [鳩])

上 巻		中 巻		下 巻	
1	かぎやで風節 [か]	1	作田節 [昔]	1	池ンタウ節 [か]
2	恩納節 [か]	2	ちゃんな節 [昔]	2	打豆節 [昔]
3	中城はんた前節 [か]	3	首里節 [昔]	3	與那節 [昔]
4	こてい節 [鳩] [昔]	4	しょどん節 [昔]	4	本大浦節 [昔]
5	謝敷節 [か]	5	暁節 [瓦]	5	ハヤリグワイニヤ節 [か]
6	早作田節 [昔]	6	茶屋節 [昔]	6	久米ハンタ前節 [昔]
7	金武節 [か]	7	昔蝶節 [昔]	7	宇地泊節 [か]
8	平敷節 [か]	8	長ちゃんな節 [昔]	8	綾蝶節 [か]
9	白瀬走川節 [か]	9	仲節 [昔]	9	津堅節 [か]
10	こにや節 [か]	10	十七八節 [花]	10	ズズ節 [か]
11	辺野喜節 [か]	11	すき節 [か]	11	シホラア節 [瓦]
12	大兼久節 [昔]	12	伊集早作田節 [昔]	12	シホライ節 [か]
13	港原節 [か]	13	清屋節 [か]	13	伊集之木節 [か]
14	仲村渠節 [か]	14	東細節 [か]	14	安波節 [鳩]
15	出砂節 [か]	15	永良部節 [か]	15	勝連節 [昔]
16	瓦屋節 [瓦]	16	昔嘉手久節 [昔]	16	松本節 [鳩]
17	仲順節 [昔]	17	柳節 [か]	17	ジッサウ節 [昔]
18	仲間節 [か]	18	天川節 [か]	18	石之屏風節 [瓦]
19	つなぎ節 [か]	19	稲まづん節 [昔]		
20	本散山節 [か]	20	長伊平屋節 [か]		
21	坂本節 [か]	21	通水節 [か]		
22	ごえん節 [か]	22	本伊平屋節 [か]		
23	ちるれん節 [か]	23	比屋定節 [昔]		
24	本部長節 [か]	24	東江節 [か]		
25	揚作田節 [瓦]	25	伊野波節 [か]		
26	石ん根の道節 [か]	26	仲風節 [か]		
27	本田名節 [か]	27	述懐節 [花]		
28	花風節 [花]	28	赤田風節 [か]		
29	本嘉手久節 [か]	29	今風節 [花]		
30	本花風節 [花]				
31	芋之葉節 [昔]				
32	伊江節 [か]				
33	大田名節 [か]				
34	踊りこはでさ節 [瓦]				
35	あがさ節 [か]				
36	赤さこはでさ節 [瓦]				
37	真福地のはいちゃう節 [昔]				

続		巻		合 計	
1	世栄節 [か]	25	ソレカン節 [か]	かぎやで風型	69曲
2	垣花節 [昔]	26	ヤリコノシ節 [か]		
3	沈仁屋久節 [か]	27	カンキヤイ節 [か]		
4	揚沈仁屋久節 [か]	28	仲里節 [瓦]		
5	江佐節 [昔]	29	昔田名節 [か]		
6	湊クリ節 [昔]	30	宮城クハデサ節 [瓦]		
7	高禰久節 [昔]	31	長金武節 [か]	昔節型	35曲
8	揚高禰久節 [瓦]	32	川平節 [瓦]	花風型	6 曲
9	高離節 [昔]	33	中作田節 [昔]		
10	ナカラタ節 [瓦]	34	興儀前ン田節 [か]		
11	シャウングナイ節 [瓦]	35	久米阿嘉節 [か]	瓦屋節型	18曲
12	口説 [か]	36	屋慶名クハデサ節 [瓦]	鳩間節型	4 曲 (うち1曲は手事)
13	早口説 [か]	37	黒島節 [昔]		
14	節口説 [か]	38	ソンバレ節 [昔]		
15	道輪口説 [か]	39	武富節 [瓦]		
16	揚口説 [か]	40	ヨラテク節 [か]	総計	131曲
17	大願口説 [か]	41	子守節 [鳩]	(+ 1 曲(手事)	
18	萬歳カフス節 [か]	42	崎山節 [か]	※こてい節(上巻在)は手事が鳩間節型で歌持(前奏の意)より昔節型	
19	ウフンシャリ節 [瓦]	43	赤田花風節 [花]		
20	サインソル節 [瓦]	44	遊びシャウングナイ節 [瓦]		
21	伊計離節 [か]	45	サック節 [か]		
22	亀甲節 [瓦]	46	仲風節 [か]		
23	南嶽節 [か]	47	述懐節 [花]		
24	シヨンドフ節 [昔]				

第3章 まとめ

1、今後の研究について

これまで口伝による伝承方法がとられ、琉球王朝時代の演奏法と現在我々の演奏法が異なっている可能性は充分考えられる。その異なっている度合が、どの程度なのかを知ることは出来ない。しかし、その“ズレ”を少しでも最小に留めようと、世禮國男は伊差川世瑞とともに『声楽譜附 工工四』を考案し、さらに『琉球音楽楽典』を記載した功績は、計り知れないものだと考えられる。

筆者を含め、三線を演奏、指導する者は、今後楽典を知る必要性がさらに重要視される。しかし、それは序章でも述べたが、あくまでも演奏のための土台作りの一つなのである。

今回は“本調子の型”を中心に書いたが、今後、他の項目も研究を続けていく予定である。

“型”を知ったところで何になるのか。工工四に書かれてる音を演奏できればいいのでは、そのような意見が交わされてもおかしくないのだが、世禮はその重要性があつて記載したのだと推測できる。“型”を知ることにより、正確な三線の運指（ポジション）を行い、その三線の音色に乗せることにより、歌が生きてくるのである。

より音楽性を引き出すために、多くの者が『琉球音楽楽典』の存在に興味を示し、様々な角度で研究を重ねることで、“生きた音楽”が後生まで傳承されていくことを切に願う。

脚注

(*1)

打抜音：ウチヌチウトゥ

これは著者（世禮）の命名で従来打音の記号に依り無意識に弾奏していたのを明示したものである。打抜音とは左手指で絃を打つや否や指を絃から放って余韻をださせること。

(筆者論)

絃を押さえたらすぐに離す。打抜音の前の音が開放弦の場合は、その音をすぐに離し、打抜音の前の音が押さえる音の場合は、その音（押さえている指）を押さえたまま打抜音の指を押さえてすぐ離す。

引用文献・引用論文

世禮國男

平成20年『増訂 琉球音楽楽典』（声乐譜附 工工四附録）野村流音楽協会 P15、P16、P17

勝連繁雄

平成11年『わかりやすい 歌三線の世界 古典の魂』ゆい出版 P292

石桁真礼生 他

平成3年『楽典 理論と実習』音楽之友社 P序

参考文献

伊差川世瑞 世禮國男

平成20年『声乐譜附 工工四 上巻』野村流音楽協会

伊差川世瑞 世禮國男

平成14年『声乐譜附 工工四 中巻』野村流音楽協会

伊差川世瑞 世禮國男

平成元年『声乐譜附 工工四 下巻』野村流音楽協会

伊差川世瑞 世禮國男

平成15年『声楽譜附 工工四 続巻』 野村流音楽協会
伊波興紀・伊波興厚・仲里陽史子

平成6年『声楽譜附 箏曲工工四 下巻』 琉球箏曲興陽会
伊波興紀・伊波興厚・仲里陽史子

平成12年『声楽譜附 箏曲工工四 続巻』 琉球箏曲興陽会

昭和50年『世禮國男全集』 野村流音楽協会

小宮礼子

平成19年度 修士論文 『琉球古典音楽の伝承法の研究』

平成14年『創立40周年記念誌』 琉球古典音楽湛水流保存会